（1 月 30 日）「マタイによる福音書 9：18～26」
イエスは振り向いて、彼女を見ながら言われた。「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った。」そのとき、彼女は治った。
（マタイによる福音書 9 章 22 節）

・今日の物語に最初に出てくるのは、一人の指導者です。彼は自分の娘を助けてほしいと、イエス様に願い求めました。イエス様はその指導者の願いを聞き入れ、彼の家へと向かいます。
・一行が進んでいると、一人の女性がイエス様に近づいてきました。彼女は 12 年間も患っており、出血が続いていました。血は不浄なものと考えられていたこともあり、彼女は後ろから近づいたのでしょう。そしてそっとイエス様の服の房に触れました。
・彼女は癒されました。「イエス様なら何とかしてくださる」という信仰を、イエス様は認められました。ただ指導者のこのときの気持ちは、どうだったのでしょうか。結果的に彼の娘も起き上がりましたが、すぐに願いが叶えられない。そのいら立ちをわたしたちも感じたことはないでしょうか。

（1 月 31 日）「マタイによる福音書 9：27～34」
イエスがそこからお出かけになると、二人の盲人が叫んで、「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と言いながらついて来た。
（マタイによる福音書 9 章 27 節）

・礼拝の中で、「キリエ」を唱える場面があります。「キリエ　エレイソン　クリステ　エレイソン　キリエ　エレイソン」という言葉を直訳すると、「主よ、わたしを憐れめ　キリストよ、わたしを憐れめ　主よ、わたしを憐れめ」となります。
・イエス様は二人の目の見えない人をいやされます。それは彼らの叫びを聞いたからでした。「わたしにできると信じるのか」と聞かれるイエス様に対して、彼らは「はい、主よ」と答えます。
・イエス様はわたしたちの叫びを聞いてくださいます。祈りを通してわたしたちが願い求めることに耳を傾け、「わたしにできると信じるのか」と聞かれるのです。その問いに対して、わたしたちはどのように答えることができるでしょうか。

福　音　書　通　読

1 月

（1 月　1 日）「マタイによる福音書 1：1～17」
ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。（マタイによる福音書 1 章 16 節）

・新約聖書の初めにはイエス様の系図が書かれています。聞き慣れない名前の羅列なので、読む気が少し薄れてしまうという方もおられるでしょう。
・この系図には、マリア以外にタマル、ラハブ、ルツ、ウリアの妻という 4 人の女性が出てきます。タマルはしゅうとの子を産みました。ラハブは遊女、ルツは異邦人です。そしてウリアの妻であるバト・シェバはふたりの男の妻となりました。女性の名前が系図に載せられるだけでも異例なのに、いわゆる「罪人」や「異邦人」と呼ばれていた人がイエス様の系図に登場するのです。
・そこには神さまの思いがあふれているように思います。4 人の女性だけが罪深かったわけではなく、それを取り巻く人々や社会、そして人類が罪にまみれていました。その罪を贖うために、イエス様は遣わされました。「罪の系図」の中に、イエス様は誕生されるのです。

（1 月　2 日）「マタイによる福音書 1：18～25」
夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。　（マタイによる福音書 1 章 19 節）

・「聖霊によって身ごもった」マリアと、ヨセフはひそかに縁を切る決心をしました。それは彼が「正しい人」であったからです。
・「正しい人」とはどういう人のことでしょう。もし律法をきちんと守る人を「正しい人」と呼ぶのであれば、ヨセフはマリアの姦淫の罪を認め、引き渡さなければならなかったでしょう。そしてマリアは石打の刑に処されることになったはずです。しかしヨセフは、神さまの前に「正しい人」でした。神さまを畏れるヨセフが下した決断は、マリアの身を守るということだったのかもしれません。
・そして生まれてくる子は、「インマヌエル（神は我々と共におられる）」と呼ばれるようになります。この一連の出来事を通して神さまが伝えたかったこと、それは「わたしは共にいる」ということなのです。

（1 月　3 日）「マタイによる福音書 2：1～12」
学者たちはその星を見て喜びにあふれた。（マタイによる福音書 2 章 10 節）

・マタイによる福音書に描かれるイエス様の誕生物語は、ルカ福音書と比べると少し寂しいかもしれません。マリアにみ告げを伝える天使ガブリエルも、羊飼いも、宿屋も、飼い葉おけも、何も出てこないからです。
・救い主の誕生は、ユダヤの王様でも、祭司や律法学者でもなく、東方の占星術の学者（新しい聖書では博士と翻訳されています）に伝えられました。これはイエス様はユダヤという小さな世界のためだけでなく、世界中の人のためにお生まれになったということなのではないでしょうか。
・占星術の学者たちは、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げました。幼稚園などでのクリスマス劇では「三人の博士」が登場し、それぞれ歌いながらお金、油、お薬を持ってくる場面があります。そのあとみんなで「心をおささげします」という 4 番を歌います。わたしたちはイエス様に、何をおささげするのでしょうか。

（1 月 28 日）「マタイによる福音書 9：1～ 8」
その人は起き上がり、家に帰って行った。
（マタイによる福音書 9 章 7 節）

・イエス様の元に、中風の人が床に寝かされたまま運ばれてきました。「中風の人」は新しい聖書では「体の麻痺した人」と訳されていますが、この人は歩くことができなかったようです。
・この時代、歩くことができないと生活するのも大変でした。しかし彼を苦しめていたのはそれだけではありません。「中風の人」のような病気になる人は、神さまに対して何かとんでもないことをしていたと思われていたのです。つまり彼は「罪」を犯したからそうなったのだと考えられていました。
・イエス様はまず、「あなたの罪は赦される」と告げます。それは何よりも、社会から排除され、共同体からつまはじきされていた彼が、元の場所に戻ることを意味します。そのことによって、彼は起き上がることができるのです。

（1 月 29 日）「マタイによる福音書 9：9～17」
イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」
（マタイによる福音書 9 章 12 節）

・イエス様は徴税人マタイに声を掛けました。徴税人はローマ帝国に命じられユダヤ人から税金を集めていましたが、彼ら自身もユダヤ人でした。彼らは決められた額以上に取り立てていましたので、ユダヤ人からは「裏切り者」扱いされていました。
・罪人と徴税人、ユダヤ人が決して関わろうとしなかったその人たちと、イエス様は食事をします。これはユダヤ人にとっては考えられない事でした。しかし神さまの思いは、丈夫な人ではなく病人に向けられているのだとイエス様は伝えるのです。
・断食や古い戒めを守ることが、神さまの目にかなったことではないのです。憐れみや慈しみの心を向け、すべての人を受け入れる。そのためにイエス様はわたしたちの間に来られたのです。

（1 月 26 日）「マタイによる福音書 8：23～27」
イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とをお叱りになると、すっかり凪になった。
（マタイによる福音書 8 章 26 節）

・教会は舟にたとえられることがあります。奈良基督教会の礼拝堂も中に入ると、箱舟に乗っているかのようです。
・波が穏やかで目的地も明確に示されていると、舟の中はとても快適です。気の合った仲間と一緒に世間話でもしながら進んでいく。それが教会かと思ったら、実は大間違いです。教会だからこそ嵐に遭い、教会の中にいるからこそ逆風に悩まされる。もっと言えば、順風の中で漂っているのは教会ではありません。
・わたしたちの間には、恐れや戸惑い、不安がたくさんあります。その中を、わたしたちの舟は進んでいくのです。でも大丈夫。イエス様が一緒に乗ってくださっています。

（1 月 27 日）「マタイによる福音書 8：28～34」
すると、町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。そして、イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言った。
（マタイによる福音書 8 章 34 節）

・聖書には時折、とても残酷に思える物語が出てきます。今日の箇所にも、悪霊が入ったことで崖から湖になだれこみ、溺れ死んだ豚の群れがでてきます。豚も、豚飼いも、とんだ災難です。
・聖書の中で「豚肉」は「けがれた」ものとされ、食べてはならず、死体に触れてもいけないとされていました。だからといって湖で溺れ死ぬのはかわいそうな気もします。
・ただこの箇所で大事なのは、悪霊が墓に縛り付けていた二人の人を、イエス様が解放されたということです。死の淵から彼らが解き放たれたことが、大事なのです。そして悪霊は、豚と共に湖に沈んだということです。（やっぱりちょっとかわいそうです）

（1 月　4 日）「マタイによる福音書 2：13～18」
さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。
（マタイによる福音書 2 章 16 節）

・日本聖公会では「祝日」という日を設けています。使徒聖アンデレ日（11 月 30 日）や聖ミカエルおよび諸天使の日（9 月 29 日）などがそうです。その中に「聖なる幼子の日」という日が 12 月 28 日にあります。
・今日の聖書には、悲しい出来事が書かれています。イエス様の誕生を快く思わないヘロデ王が、そのあたり一帯の二歳以下の男の子を一人残らず殺したというのです。「聖なる幼子の日」は、その子どもたちのことを覚えてお祈りする日です。
・イエス様が来られたことで、悲しみがもたらされた人たちもいたのです。そのことを、わたしたちはどのように捉えたらよいのでしょうか。

（1 月　5 日）「マタイによる福音書 2：19～23」
ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。
（マタイによる福音書 2 章 22b～23 節）

・ヘロデ王の手を逃れ、エジプトに避難していたヨセフ、マリア、そして赤ちゃんイエス様は、夢のお告げ通りにイスラエルに帰ります。主の天使はイエス様の誕生予告の時と同様に、ヨセフの夢に現れます。
・夢のお告げとは、神さまのみ心のことです。彼らは神さまの思いに従い、歩んで行きます。そして彼らが向かった場所は、ガリラヤ地方のナザレという小さな村でした。
・エルサレムのような大きな都市ではなく、貧しい村ナザレで暮らすことが、神さまのみ心だったのです。イエス様はそこで少年時代を暮らしたことで、わたしたちの気持ちにも寄り添ってくださることができるのです。

（1 月　6 日）「マタイによる福音書 3：1～12」
わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。
（マタイによる福音書 3 章 11 節）

・イエス様が活動を開始される前に、洗礼者ヨハネが荒れ野で叫んでいました。「悔い改めよ。天の国は近づいた」。彼は道を備えるために来ました。
・「悔い改め」とは簡単な反省や思い直しではなく、心の向きを 180 度変えることです。神さまの方ではなくそっぽを向いていた心の向きをグリンと変え、神さまに向き直ることを言います。
・洗礼者ヨハネは水で洗礼を授けますが、後から来る人は聖霊と火で洗礼を授けるといいます。後から来る人とはイエス様のことです。イエス様はわたしたちにどのように関わってくださるのでしょうか。

（1 月　7 日）「マタイによる福音書 3：13～17」
イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。
（マタイによる福音書 3 章 16 節）

・イエス様はご自分の活動の前に、洗礼者ヨハネからヨルダン川で洗礼を受けることを決断されます。洗礼者ヨハネは「罪の赦しのための洗礼」を宣べ伝えていました。それではイエス様は、ご自分の罪が赦されるように、洗礼を受けられたのでしょうか。
・洗礼には他にも大きな意味があります。それは「神さまが共にいてくださる」しるしです。聖公会の洗礼の中で、司祭は神さまが共にいてくださるように祈りながら、志願者の額に水で十字を切ります。
・イエス様が洗礼を受けられたとき、神さまの霊がイエス様の元に降りました。イエス様はこれから、神さまのみ心のままに歩んでいかれます。

（1 月 24 日）「マタイによる福音書 8：5～13」
イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきり言っておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。
（マタイによる福音書 8 章 10 節）

・イエス様のうわさを聞いて、一人の百人隊長がイエス様に近寄り、懇願します。しもべが中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいますと。
・百人隊長はユダヤ人ではありませんでした。いわゆる異邦人です。彼はイエス様がしもべの元に行こうとされるのを止め、ただ言葉だけを求めます。手を置くことも、触れることもなくても、イエス様なら言葉だけでいやしてくださる。その信仰をイエス様は認められました。
・わたしたちも本来であれば、救いの中には入れてもらえない“異邦人”でした。しかしイエス様はわたしたちもまた、救いのみ手の内に包み込んでくださいます。そのイエス様のお言葉を、わたしたちも待ちましょう。

（1 月 25 日）「マタイによる福音書 8：14～22」
それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った。」
（マタイによる福音書 8 章 17 節）

・イエス様がわたしたちの間に来られた大きな目的がここに書かれています。それはわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担うということです。患いは新しい聖書では、「弱さ」と訳されています。
・このように書くと、「それでは今のわたしたちには関係ないじゃないか」という声が聞こえてきそうです。確かに肉体を持つイエス様は十字架に死に、墓に葬られました。しかしイエス様は復活されました。わたしたちと共にいて、重荷を負ってくださるためです。
・そのイエス様に倣い、生きていくことがわたしたちには求められています。弱く、小さくされ、前を向いて歩くことができない人に寄り添う、わたしたちはそのように歩んでいけるでしょうか。

（1 月 22 日）「マタイによる福音書 7：13～23」
狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。　（マタイによる福音書 7 章 13 節）

・日本人の中でキリスト教の割合は 1%、さらに礼拝にも行っている人の割合はさらに低くなると言われています。ということは、わたしたちは日本においては“狭い門”を選んでいるということになるのでしょうか。
・聖書の中には今日の箇所のように、「裁き」や「滅び」を連想される箇所が多くあります。しかしわたしたちは聖書を読むときに、神さまはこの世の人々を一人残らず救うためにイエス様を遣わされたということを忘れてはなりません。
・「道」であるイエス様は、わたしたちが自分の力だけで入ろうとしても無理だった「狭い門」を、こじ開けてくださいます。イエス様を通らなければ、わたしたちは神さまの元へはいけないのです。

（1 月 23 日）「マタイによる福音書 7：24～8：4」
雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。　（マタイによる福音書 7 章 25 節）

・心が震えるとき、どうしたら平安になるでしょう。大きな優しさや愛にふれたとき、少しずつ心が癒されていくという経験をしたことがあるかもしれません。
・わたしたちは何を土台とするのでしょうか。何に身を委ねて生きていくのでしょうか。「神さまがいてくれるから大丈夫」、その思いを持つことができればと思います。
・後半には、イエス様が「重い皮膚病」を患っている人をいやす物語が載せられています。「重い皮膚病」は新しい聖書では「規定の病」と訳されていますが、「宗教的にけがれている」という意味です。その病気の人に触れたら自分もけがれると人々は定め、遠ざけていました。しかしイエス様は、病気の人に手を差し伸べ触れられます。その思いはわたしたちにも向けられています。

（1 月　8 日）「マタイによる福音書 4：1～11」
さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。
（マタイによる福音書 4 章 1 節）

・イエス様は荒れ野で悪魔の誘惑を受けます。40 日 40 夜の「40」という数字は、出エジプトの際にイスラエルの民が荒れ野をさまよった「40 年」を思い起こさせます。とてつもなく長い期間という意味を持ちます。
・イエス様を荒れ野に導いたのは“霊”でした。新共同訳聖書で“霊”と書かれている場合は「聖霊」あるいは「神の霊」「主の霊」が意味されていると思われます（凡例より）。つまりイエス様が荒れ野に行って誘惑を受けたのは、神さまのご意思だったのです。
・イエス様は 3 つの誘惑を、聖書の言葉を用いて退けました。聖書はわたしたちに大切なことを教えてくれるのです。

（1 月　9 日）「マタイによる福音書 4：12～17」
そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。
（マタイによる福音書 4 章 13 節）

・イエス様は活動の場所として、ガリラヤ湖畔にある町カファルナウムを選ばれました。多くの人々が漁で生計を立てる、そのような場所でした。
・多くの人に手っ取り早く福音を宣べ伝えるなら、大勢の人が暮らし、政治や宗教の中心であったエルサレムの方がよかったでしょう。しかしイエス様はそのような場所を選ばれませんでした。
・イエス様は人々の生活の場に行かれたのです。人々の喜びや楽しみ、悲しみや苦しみ、涙や痛みを共に担うことが、イエス様の宣教だったのです。

（1 月 10 日）「マタイによる福音書 4：18～25」
イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。
（マタイによる福音書 4 章 18 節）

・イエス様はまず、弟子たちを招きます。最初に弟子にしたのは漁師の兄弟、ペトロとアンデレでした。
・彼らは自分から弟子になりたいと志願したわけではありませんでした。イエス様が一方的に見つけられ、声をかけられました。また彼らは特別な能力を持っていたわけでもなさそうです。イエス様は湖のほとりで、ただ見いだされたのです。
・わたしたちも同じです。たとえ秀でたところがなくても、神さまの前に正しくなくても、イエス様はわたしたちをも招いてくださいます。

（1 月 11 日）「マタイによる福音書 5：1～12」
心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
（マタイによる福音書 5 章 3 節）

・今日の箇所は、山上の垂訓（山上の説教）と呼ばれます。マタイによる福音書 5 章から 7 章まで、たくさんのイエス様の言葉が記されています。
・イエス様が最初に語ったのは「心の貧しい人々は、幸いである」という言葉でした。言語通りに訳すと、「幸いだ、あなたがた心の貧しい人たちは」となります。ご自分の周りに集まってきた群衆を目にして、イエス様は「幸いだ」と語られます。
・心が貧しいとは、もう自分の力ではどうしようもないほどカラカラの状態です。なぜそのときが幸いなのでしょう。それは神さまに頼るしかないからです。神さまにすべてを委ね、歩んでいくことができるから、あなたは幸いなのだとイエス様は語られるのです。

（1 月 20 日）「マタイによる福音書 7：1～6」
あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。
（マタイによる福音書 7 章 3 節）

・おが屑と丸太、その大きさの違いは相当なものです。聖書協会共同訳では、丸太は梁と訳されています。建物を支える大きくて重たい梁が、自分の目の中に入っていることを想像しましょう。痛くてたまらないと思います。
・わたしたちはどうしても、人の行動が気になります。自分の価値判断に照らし、人を批判してしまうこともしばしばです。
・しかし神さまから見ると、わたしたちの誰一人として正しい者はおりません。けれども神さまはわたしたちを裁くのではなく、そのまま受け入れてくださいました。だからわたしたちも、周りの人を裁くのではなく受け入れたいと思うのです。

（1 月 21 日）「マタイによる福音書 7：7～12」
求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。
（マタイによる福音書 7 章 7 節）

・わたしのメールアドレスは、「matthew7_7」から始まります。これは「マタイによる福音書 7 章 7 節」という意味です。わたしはこの箇所を愛唱聖句として、ずっと大切にしています。
・この言葉は、わたしが通っていた中学校の玄関に飾られていました。最初に見たときには、「神さまは何でもかなえてくれる方」だと思っていました。
・しかし子どものことを本当に愛する親は、何でも子どもの言いなりにはならないように、神さまもわたしたちのことを大切に思って、わたしたちに必要な物を与えて下さるのだと思います。たとえそれがわたしたちの望みどおりではなかったとしても、神さまの目から見たら、それが「良い物」なのです。

（1 月 18 日）「マタイによる福音書 6：16～24」
富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。
（マタイによる福音書 6 章 20 節）

・信仰は人に見せるものではありません。また人と比較するものでもありません。そして人に評価されるものでもありません。わたしたちと神さまとの関係であり、徳を積んだり位を上げたりするようなものではありません。
・自分の心を神さまだけに集中したときに、わたしたちのおこないは変わっていきます。この世的な目はどうでもよくなり、まさに「天に宝を積む」ことになるのだと思います。
・そのためには、わたしたちの目を澄ませることが大切です。欲望や自分の思いで目が濁っているときには、ついつい周りのことに目が行ってしまうでしょう。そうではなく目を澄まし、神さまを仰ぎ見ることが大事なのではないでしょうか。

（1 月 19 日）「マタイによる福音書 6：25～34」
だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。
（マタイによる福音書 6 章 34 節）

・わたしたちは日々、様々なことに対して思い悩みます。老後の心配、子どもの将来、自分の仕事といった大きなものから、夕食は何を食べよう、どの服を着よう、どの枕がいいか、などの日常的なものまで。
・空には鳥が飛び、野には花が咲いています。イエス様はその様子を見ながら、人々に語ったのでしょう。でもわたしたちが鳥や花のように、すべて大きな力に身を任せて歩むことはできるのでしょうか。
・わたしたちは小さな波が来ても叫びます。少し明かりが消えただけでも立ち止まり、うずくまってしまいます。何度も思い悩むわたしたちだからこそ、今日の言葉を心に留めていきましょう。「明日のことは明日に、神さまにお任せしましょう」。

（1 月 12 日）「マタイによる福音書 5：13～20」
あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。
（マタイによる福音書 5 章 14 節）

・今日の箇所には、「地の塩」、「世の光」という言葉が出てきます。塩も光も、身近にあるものです。
・塩には味をつけたり腐るのを防いだりする働きがあります。いずれの場合も素材に溶け込んで、目立たなくなってしまいます。反対に塩の存在が目立ちすぎると、素材の良さを壊してしまうことがあります。「地の塩」とは、周りの人の間でどのように生きる人のことでしょうか。イエス様はわたしたちに何を求めておられるのでしょうか。
・わたしたちは、光の子として歩みます。神さまからの光を浴び、それを周りに照らすのです。自分の力で光を発することはできないかもしれません。しかしわたしたちには、神さまからの眩い光があります。その光を隠さずに、輝かせていきましょう。

（1 月 13 日）「マタイによる福音書 5：21～30」
しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。
（マタイによる福音書 5 章 22 節）

・旧約聖書の中には、「十戒」と呼ばれる決まりがあります。「わたしのほかに神があってはならない」から始まり、「殺してはならない」、「盗んではならない」といった 10 の戒めを、神さまはモーセを通して人々に与えました。
・人々はそれらの「律法」を守ることで神さまの前に正しい者とされると信じていました。そして「律法」を守ることができない人を「罪人(つみびと)」と呼び、排除していきました。
・しかしイエス様は言われます。たとえ人を殺さなかったとしても、人に対して腹を立てたり「ばか」と言ったりすることだけで、裁かれるのです。神さまの前に正しい人など、誰一人いないのです。

（1 月 14 日）「マタイによる福音書 5：31～37」
しかし、わたしは言っておく。不法な結婚でもないのに妻を離縁する者はだれでも、その女に姦通の罪を犯させることになる。離縁された女を妻にする者も、姦通の罪を犯すことになる。　（マタイによる福音書 5 章 32 節）

・聖書を読んでいると、胸が苦しくなることがあります。それは「～してはならない」という「禁止」の内容が多くあるように思えるからです。今日の聖句もその一つです。
・当時の人々は律法や昔の人の言い伝えを根拠として、自分たちの都合の良いように物事を解釈していきました。「離縁状」も「誓い」もその一つでした。しかし例えば、男性の都合で簡単に離縁される女性の存在は、無視されていました。
・イエス様の「～してはならない」という言葉。その言葉の裏には、「自分の解釈や都合で聖書を理解するな。神さまの思いを曲げるな」という思いがあるのかもしれません。神さまのみ心は、すべての人に愛を届けるということです。

（1 月 15 日）「マタイによる福音書 5：38～42」
しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。
（マタイによる福音書 5 章 39 節）

・「目には目を、歯には歯を」という言葉は、聞きようによっては随分厳しく感じるかもしれません。「やられた分だけやり返せ！」、そのようにも聞こえます。
・しかしこの言葉には、「やられた以上の仕返しをするな」という意味があります。暴力の連鎖の中で、被害が増大することを防ぐ役割があったと言われています。
・ところがイエス様は、「手向かうな」どころか、「右の頬を打たれたら、左の頬を向けろ」とまで言われます。すべての連鎖を、ここで断ち切りなさいという意味なのでしょうか。それともすべてのことは神さまに委ねなさいということなのでしょうか。

（1 月 16 日）「マタイによる福音書 5：43～6：4」
しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。　（マタイによる福音書 5 章 44 節）

・当時のユダヤの社会において、隣人(同じ共同体にいる人たち)なのか、異邦人(ユダヤ人以外の人)なのかということはとても重要なことでした。ちなみにユダヤ人であっても罪人や徴税人は「隣人」の中から排除されていました。
・だから彼らは、律法にある「隣人を愛せ」という戒めを守っていると思っていました。自分たちとは違う人たちを、「敵」として遠ざけ、憎んでいたからです。しかしイエス様は「敵を愛せ」と言われ、さらに別の箇所では「敵」と考えていたサマリア人さえも「隣人」だと語られました。
・わたしたちには、愛する対象から外してしまった人はいないでしょうか。その人のことを思い、祈ることができるでしょうか。

（1 月 17 日）「マタイによる福音書 6：5～15」
彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。
（マタイによる福音書 6 章 8 節）

・「祈るときには」という小見出しに続いて、どのように祈るべきということが書かれています。要は、形式や人の目を気にするような祈りは必要ないということでしょうか。
・「あなたがたの父(神さま)は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」とはどういうことでしょう。それでは祈りは必要ないのではないかと思ってしまいます。例えば母親が子どもから願いを聞かされたとき、たとえ母親がその願いを前から知っていたとしても、直接子どもの口から聞くとうれしいように、神さまもわたしたちの祈りの言葉を喜んでくださるのではないでしょうか。
・「祈る言葉がよくわからない」と思われるのであれば、イエス様が教えて下さった「主の祈り(9～13 節)」を祈るようにしましょう。そしてその祈りを元にしながら、ご自分の感謝や願いを加えていきましょう。